
点心中華編

せみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

点心中華編

【Nコード】

N5193D

【作者名】

せみ

【あらすじ】

こここの商店街以外で見ることの出来ない点心グループ系列の飲食店。舞台はそのうちの1つ『点心中華編』。出てくる料理はあんまり上手くないけども、コアな常連客がいればそれでいいと思ってる主人公と、もうすでのその考えが当たり前と思っているヒロイン。点心グループ1の売り上げを目指して2人でがんばっていく物語。

第1回

『のんびり自転車をこげば、いつもの道でも違った風景に見えるはず。たまには何も考えずにぶらぶらするのもいいぞ。』

おじいちゃんがよく言っていた言葉だ。

小さい頃によく聞かされたせいか、暇なら家の前をぶらぶらする習慣が身についてしまった。

新しく引越してきた人には理解不能だったに違いない。越えてきて1ヶ月の間は、確実にかわいそうな子だと思ってるに違いない。

そして今日。高校生になってもぶらぶらする癖は直らず、のろのろと自転車をこいで商店街のほうを散策しに来た。

この商店街は、市とか県が何かをしてもいないのに、外国料理の店が沢山ある。

と、言っても、どの店も親会社が『点心グループ』という会社だ。しかしこの点心グループ系列。この商店街以外で見たためしがない。何を狙っている、点心グループ社長。この商店街じゃ収入の見込みがないぞ。

ちょうどそこは、『点心中華編』の店の前だった。何度も外見だけは見てきたものの、いまいち店に入りたいとは思わないそのたたずまい。

ゆつくりこいでたから、アルバイト募集の張り紙が目に入ってきた。普通に走ってたら、動体視力がよすぎない限り、まず見ることの出来ない張り紙だろう。因みに自給は1000円と、かなり高いと見受けられる。

せっかくの夏休みだし、自給のいいバイトでもして過ごそうかのんきに考えていた矢先のこと。

目の前で、豪快に人がこけた。両手に持っていた買い物袋がくると1回転して、無惨にも地面に叩きつけられた。その反動で袋がパン。ガラスの割れたような音がしたと思ったら、どろっとしてある赤い液体が地面に広がっている。

さてどうしよう。自分的には、そこまで人が悪いと思わないので、素直に助けよう。

すつと、転んだ人の前に手を持っていく。

「あの、大丈夫ですか？」

「あ．．．．．あ、ありがとうございます．．．．．」

にこつと笑って、どう見ても大丈夫じゃなさそうな女の人の手を持つ。

その人は、ようやく立ち上がって軽い会釈をした。

そして、その人は気づいた。大惨事の惨劇を．．．．．

「つかぬ事をお聞きますが、これは誰がやりましたか？もし犯人を知っているなら教えてください。速攻で締めてきますんで」
おおつと、これはどうした。カワイイか顔して腹黒っ。いやあまったく、いまどきの女子高生って、こんな物騒な言葉を使うんだね。勉強になりました。

「ああ、残念ながら犯人はあなたですよ」

「．．．．．」

あつ、やべ。レッツ沈黙かよ。なんか地雷踏んだ？ここは『犯人

は私です。なんちゃって『風に言うべきだったか？いや、これもま
ずいな。ああ、どうすればいいんだ？

「てっ……手伝いましょうか？」

いい案が浮かばず苦しい展開だが、ここはひとまずさっきの言動
を忘れてもらうことにしよう。なんか、サンタはいないくらいに夢
を壊されたような顔されたしな。

「……………」

なんか、とてつもない何かに押しつぶされそうな、とにかくやば
い。死ぬ？死亡フラグ？5W1H的に言えばwhyだよ。いやwh
atか。嫌だよ、まだ死にたくないよ。下界ってこえーな！。

ほんとすみません。投了です。

「あっ……あの、ありがとうございます……………」

そうそう、そうやってちんも……うん？すみません、冤
罪ですね。ごめんなさい。ああもう、気を取り直して片付けしよ。

結局片付けるのに10分くらいかかってしまった。瓶系のものは
苦労したものだ。

「ふう、やっと終わったね」

「ありがとう。おかげでかなり助かったよ」

「それじゃあ、今度は気をつけなきゃね」

「ああ、ちよっと待って」

おっとっと。そうやって、人が自転車をこぎはじめる前に肩をつ
かまないでくれるかな。今度は私がこけちゃうから。つか、なに？
「お礼がしたいんだ。食べてかない？」

彼女が指したのは言うまでもなく『点心中華編』だった。

中華料理なんてめったに食べないせいか、メニューを読むのに一苦労。頼んだ料理は、かろうじて読めた麻婆豆腐。ここはシンプルにチャーハンといきたかったものの、ご飯類のページがよく分からなかった。

そしてきた料理。オプシヨンとしてこけた彼女がチャイナドレス姿で同席している。いまだきの中華料理店では、メイド喫茶風のおもてなしをしてくれるのか。勉強になりました。

「さあ、さめないうちに召し上げ」

催促されるがままに一口。……うん。なんとはいいいのか。ストレートに言えば口に合わない。さて、ストレートに口に合わないといったらどうなる？即死亡。はあ、どうしよう。

「あれれ。口に合わないって顔してるねえー」

そうですか。あなたは人のココロを読めるんですね。すばらしい。でも今はその力発揮しないで。

「ううん、おいしいよ」

一気に2、3口食べる。さらに3口。無理に流し込んだが、気が緩むと戻しそう。

「大丈夫？そんなに見栄張られて戻されるのも困るし」

なんなんだこの店は。店員らしき人はチャイナドレスだし、料理もはつきり言っていまいちだし。大丈夫か、点心グループ社長。

「この料理は日本人向けに作られてないからね」

「どういうこと？」

「だからね、この店は中国人の人が、地元の味を食べる場所なの。簡単に言えば、日本のカレーと本場インドのカレーとはぜんぜん違うでしょ。それとおなじだよ。」

日本人向けに改良された味じゃなくて、本場の味をそのまま出している。それだけのことだよ」

なんか、分かったような分からないような。

それはそうと、この麻婆豆腐。どうすればいいのかなって考えない方がよさそうだな。今度こそやばそうだ。

第1回（後書き）

主人公＞ふう、やっと1話が終わったね。

こけた彼女＞そうだね。それより……………

主人公＞ん？どうしたの？

こけた彼女＞この『こけた彼女』っていうのやめてくれる？

主人公＞それじゃあ、何がいいの？

現在名称考考え中の彼女＞……………

主人公＞ホラね。こけた彼女がぴったりじゃない

こけた彼女（仮）＞うーん、なんかむくわれないなあ

主人公＞そんなことより、この『点心中華編』は10話で完結らしいね。

こけた彼女（仮）＞でっていう、ね

主人公＞ごめん……………

第2回

ようやく食べ終わった麻婆豆腐。大半は彼女がおいしそうに食べてくれた。

はいっ、と差し出された水。警戒心を持って、まずはティスティング。うん、ふつうだ。ごくつと一気に水を平らげる。ふう、生き返った。

「とこれでさ、ちょっと聞いていいかな？」

「うん、いいよ」

「無理なら断っていいからさ、その、ここでバイトしてみない？ここ、従業員が私を含めて2人しかいないに……」

どんどん声が小さくなっていく。けなげっていいなあ。そう、私はそこまで人は悪くないんだ。引き受けてあげようではないか。

「うんいいよ。なんか困ってそうだしね。それに、ね」

本来ならこの後に、「自給も高いしね」とくるのだが、ここは胸の奥にそっとしまっておこう。

「えっ、ほんと？ありがとう」

潤んだ瞳に見つめられ、そのうえ手まで握られて。これこそまさに、神の祝福って奴か。うん、ありがとう神様。千載一遇っていう四字熟語がピッタリっぽいな。

「ところでさ。何でチャイナドレス着てんの？まさか制服とか？」

「そのまさかだよ」

うつそ、マジッすか先輩。私も着るんすか、そのチャイナドレスいや、一人称は私ですけど、一応男ですから。そんな趣味ありません。

「大丈夫だって、男の子にはそれ相応の制服があるから」

ほっ。つとまで。また見透かされたか。たく、やるなあぬし。

「んで、いつからくればいい？」

「それじゃ早速だけど、明日の8時にはここに来てくれないかな」

「OK。それじゃ8時にね」
「待つてるよー」

現在時刻は7時45分。あの商店街に行くにはもう家を出てないといけない時間だ。まあもつとも、とつくに家は出てってるけどね。そういえば、あの子の名前聞いてなかったな。結構可愛かったし、名前もきつとかわいいだろう。

点心の前であの子が迎えてくれた。ヤッホーと手をぶんぶん振り回して。朝からやけに元気だな。少しは見習わなきゃ。

「やあ、少し遅かったかな？」

「ううん、だいじょーぶ。それより、昨日聞き忘れたんだけどさ、君の名前は？」

そう、そう来ると私はすでに予想してたのさ。さ、なんて答えよう。普通に答えるか、はたまたちよつと面白おかしく言うか。と、ここまで考えたものの、私にはそんな能力なんてナッシングなので、ここはシンプルに普通で行こう。

「私の名前は結城或^{ゆづきある}。結ぶ城に、或いはの或。因みの高校1年生。ところで君は？」

「ふーん、結城或^はつていうんだ。勇気があるって捉えられるね。あつ、そうそう。坂東菊音^{はんていきくね}つていうんだ。よろしく、或クン」

おおっと、いきなり名前ですか。焦りますねー、なんか。

「さ、入って入って」

手を引っ張られて無理やり店内へ。傍から見ると、朝っぱらから馬鹿じゃねえの的に見えるけれども、これは拉致ですよアニキ。うらやましがったら負けって奴ですぜ。

昨日も見ただけれど、店内は意外と綺麗だった。たぶん菊音ちゃんが、せつせと掃除してんだろうな。勝手な妄想だけど。

「んじゃ、ちよつと着替えてくるからそこで待っててね。或クンの制服も持ってくるから」

脱兎のごとく駆けていった。文法的にあつてるか分からんけど、まあ気にしない。

そついや、店長つて誰だろ。今厨房にいるかな。いたら挨拶ぐらいしなきゃか、人としての礼儀だと思うからな。

厨房の方を見ても人の気配なし。もしや、店長は気を消せるのか？厨房に近づいても気配なし。今は買い出し中とかか。うん、納得。「或クーン、おまてせえ」

おお、主役の登場か。いやあ、ほんとというと菊音ちゃんがいるから、バイト始めたようなもんだしね。あと自給も高いか。

「はい、これが或クンの制服」

と、渡された制服。なんと言えがいいのか。もちろん、チャイナドレスではないのだが、なんだかなあ。中国武術の達人が着るような、カンフーの服かよ。似合わねー。マジやばいってこれ。

「まあ、お似合いよー」

と、菊音ちゃん。あなたが男だったらぶっ飛ばしてるよ、もう。

まあしかし、生地ของさわり心地はいいね。さらさらして、意外と気持ちいい。何の生地だろ？

「ああ、それね。それは確か……そう、一応絹だったはずだよ。シルク、シルク」

フーン、絹かあ、絹ねえ……って、まじっすか？やばいって、私には一生縁のない物だって。高嶺の花だってこれ。

「さ、仕事仕事」

ああ、どっか行っちゃった。たく、どうすりゃいいんだよ。いくら見たって絹には変わりない。いっそのことパクツちゃおつかな。

仕事かあ、だるっ。はあ、バイト引き受けなきゃよかった。自給高いわりには客来ないしさ。やってけんのかなこの店。裏では、暴

力団とかマフィアとかと繋がってたりして。うう、考えるだけで寒気がしてきた。

考えててもしょうがない。仕事内容知らないけど、なんかやるか。

第2回（後書き）

或>おめでとう菊音ちゃん。

菊音>???なにが?どうしたの?

店長>おめでとう。

菊音>ああ、まだ本編に出てない店長まで。いったいどうしたの?
なんかエヴァの26話みたいだよ?

或>まだ気づかないの?ほら名前だよ。

菊音>名前?.....ああ、『こけた彼女』から『菊音』に変
わ

或>昇進したんだよ。

菊音>ちょ、何でさえぎんのよ?だいいち昇進って何?

或>あつ、長いからもうここでおしまいってことで

菊音>ちょまつ、なんなの

第3回

いやあ、こりやたまげた。ランチタイムのときの人の出入りが、ハンパなくやばかった。よくこの店の料理が食えるなあ、感心感心と。儲かってるんだからそれ以上のことは言わないけれど、コアなファンっていうのは怖いねー。

さらに驚きは続く。店長があまりにも普通なこと、店長だけ普通のコックさんの恰好をしてること、不思議なことにお昼ご飯がこの上なく上手いこと、などなど。

しかしほんと、このお昼ごはんは感激しちまったぜ。キャベツにモやし、ハムにベーコン、ニンジンかまぼこちくわに豚肉、ナルトにたまねぎ、その他いろいろを中華スープで煮て、そこにご飯を入れて10分くらい。仕上げに溶き卵をかけて、立派な雑炊の出来上がり。あつ、やば。思い出しただけでよだが。これが冬ならなおよかったな。

ランチタイムがすぎて小休止。単純作業だけに意外と疲れた。
「或クン、こちらが店長の椎名佑大しいなゆうだいさんだよ。料理も上手いし、奥さんも美人だし、なんかもうパーフェクトな存在だよ」

料理が上手いってのは何かあれだけど、なんと言うか柄にあつてゐるな。人に優しいってか、金貸してつていたら貸してくれそうな感じ。ま、実際には言わないけどね。

因みに、このカンフースタイルにもなれてきた。しかしいいねーこれ。生地は滑らかで、肌触りがさらさらで、なんか欲しいなこれ。

さて、午後の営業。

6時ぐらいから客がちらほらと、店に吸い込まれるように入ってきた。また言うけど、コアなファンって怖いっす。

注文数が多いのは、ラーメンプラス餃子のセット。6割がたこれを頼んでいくよ。次に多いのが、麻婆豆腐にご飯。いかにも通っぽい人は、麻婆豆腐の中ににご飯を入れて食べてた。自分の中ではマザーライスという名前になった。

結局9時現在で、100人弱は客が来ただろう。言っちゃ悪いんだけど、意外と人気だな。味が微妙なのに、よくもまあ客が来るもんだ。そこまで安くもないし、隣には他の点心グループがあるのに、わけわからん。

普段こんな仕事に慣れてないせいか、腕やら足やらが筋肉痛に。

体力はあるほうだと思ってたけれど、疲労感がハンパない。

「おやおやあ、ずいぶん疲れてるみたいだね」

「うん、簡単そうに見えても意外と疲れるんだねこれ」

「まあ、初日つつうのはこんなもんだよ。私も始めた頃は、帰りフラフラだったもんね」

「フーン、そうなんだ。ところで、菊音ちゃんはいつからバイト初めたの？」

「高校は行ってからすぐからかな。今年の4月ってことね」

「と、いうと、3カ月半かあ。先輩だね、バイトの」

「バイトのって、どういうことかな？」

「いやだつてさ、学年的には同級生じゃん」

「えっ、同級生なの？てつきり、2、3上かと思ってたよ」

「いやあ、意外だなあこれは。上級生に見えてたのか。ああ、なんか言わなきゃよかった。てか、いいねえ、こんな後輩がいれば。仕事もきつちりやってくれるし、何よりかわいってのがいいね。これは自慢できるよ。特に自分のものじゃないけれど。」

しかしこの疲労。明日に堪えそうだな。腕や腿の筋肉痛は、日常生活にも被害が及ぶからなあ。腕が痛くて何にも出来ないとかいったら、マジでしゃれになんないしね。

さて、9時も回ったし、そろそろ帰るとするか。

と、言っても、まだ9時。人の出入りは衰えることを知らない。どうするか？ここで帰ったら、残りの客に菊音ちゃんが全て対応しなくてはなくなる。彼女にとっては負担なはずだ。筋肉痛なんか跳ね除けちまえ結城或。お前はやれば出来るんだ。

いやあ、しかし、相手は菊音ちゃんだ。ここのバイト暦は3ヵ月半。私から見りや結構な玄人だ。だいいち、私が来る前はそれ以前の客を菊音ちゃん一人で対応してたはずだ。とくに、私が消えてもさほど代わりはないだろう。いや、私がいたほうが邪魔か？足手まといか？

ああ、迷う、迷う。帰るか否か。受験以来の難問だな、これは。

「あのお、或クン」

ああ、くそう。帰りたいけど帰れない。目の前のものが取れないのとおんなじか。うう、どうするよ、どうする？

「或クン！」

うわあ、びっくりした。てか、気づかない方が悪いのか。

「ごめんね。で、何か用でもあるの？」

「うん、そろそろ帰りの時間だよ」

あ、そうっすか。用無しっすか。いや、本当に用無しか？まだやれるぞ。

「いや、別にまだ大丈夫だよ。一人じゃ大変じゃない、この客の量は？」

「それなら大丈夫だよ。9時から11時までの間は、店長の奥さんがやってくれるんだ。だいいち、或クンがいなかったときは一人で

やってたしね」

あつ、そうなんだ。それじゃあ帰りますかね。

「ところで、この服はどうすればいいの？」

「その服は持って帰ってね。そんでもって、明後日持ってきて。明日の服はきちんとあるから。」

更衣室で着替えてから外へ。空気が生暖かいな。やっぱ夏か。

「おまたせえ。そんじゃ、帰ろう」

こっちはくたくたなのに、菊音ちゃんは元気だなあ。

生温い風が吹いた。まだまだだなあと、笑うかのように。

第3回（後書き）

或>いやあ、更新に時間かかったね。

菊音>作者が受験生らしいよ。

或>そうなんだ。そりゃ、大変だね。

菊音>あれ？なんか冷たくあしらってるね。作者はとくに、そういう系の属性ってのはないらしいよ。

或>いや、意味わかんないよ。

菊音>うん。私も意味わかんないから。でもなんで？

或>いやだつてさ、作者は受験生なんですよ。これ執筆してる暇あったら、勉強しろつての。

菊音>それもそうだね。でもなんか後味悪いなあ、今回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5193d/>

点心中華編

2010年10月15日22時23分発行